

# The Power of KUMON English

～ 英語言語学者が子どもから学んだ KUMON の英語・EIC の価値 ～

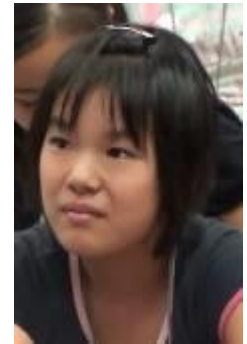
(大妻女子大学 武藤克彦)

KUMON English Immersion Camp (EIC) は 2010 年で 10 年目を迎えました。EIC が優れたプログラムであることは、参加した子どもたちだけでなく、保護者や KUMON の先生方、プログラム内容や活動の趣旨に賛同してくださる多くの方々から伝え聞かれる機会も多いと思います。しかし、EIC では何が行われ、それにより「英語の使用」という観点でどのような変化や成長が見られるのかについてはあまり知られていないのではないのでしょうか。ここでは、EIC を通しての一人の子ども成長、変化に焦点を当て、そこから見える公文式教室と EIC という 2 つの環境の間にある関連性を示唆したいと思います。

(本レポートに準じたドキュメンタリービデオがあります。あわせてご覧ください。)

## 1 観察対象の生徒について

この観察レポートでは、EIC 2010 に参加した Rio (小学 6 年女子) を対象に選びました。Rio は参加前の時点で英検準 2 級を取得、KUMON の英語は一度最終教材を終了したあとの復習で KI 教材を学習している大変真面目な生徒です。しかし、事前アンケートで尋ねた「あなたは英語を使える自信がありますか」という自己評価の質問に対して、5 段階中「読むこと」、「書くこと」、「聞くこと」はそれぞれ 4 (ある) の評価をつけましたが、「話すこと」については 3 (ふつう)、そして総合評価についても 3 の評価をつけるに留まりました。なお、Rio が通う教室の先生のお話では、学習の進度は速いのもさることながら、ふだんから読書が大好きで、分からないことや興味があることがあればインターネットで調べて教えてくれる学習意欲が旺盛な生徒とのことでした。



## 2. 事前インタビュー

EIC 開始 9 日前に事前インタビューを行いました。Rio は自分の「話す力」は 5 段階評価で「1」というさらに低い評価をしていました。Rio によると、これは「普段、英語を使う機会がないこと」と「自分の発音が気になる」ことが原因とのことでした。そして、EIC に参加する動機として「英会話をできるようにになりたい」こと、将来の夢は「動物の訓練士になること」と語ってくれました。

## 3. EIC 参加中の Rio の様子

Rio の姿を、その様子と変化・成長にスポットを当て、日ごとに追って記述します。

### Day 1 不安の中でのスタート



期待とともに不安を感じながら EIC に参加した Rio ですが、初日はその様子が顕著でした。例えば、キャンプ中、唯一日本語で説明を受ける「Japanese Orientation」では、全員に向かって日本語で「頑張る？」と問いかけるキャンプスタッフ (CS) に対して、元気に「Yes!」と答える周囲の仲間の様子を不安そうな表情で伺いながら、小さな声で

「Yes」とつぶやく程度しかできません。しかし、その後の「Ice Braking」の中で行った Sign Game（互いに自己紹介し、相手の情報を記入するゲーム）では、自分から会話をアレンジすることはできませんが、予め書かれているリストを見ながら、What's your name? や How old are you? などとひとつひとつ丁寧に質問文を読みながら質問することができていました。これは Rio が普段から丁寧に音読学習を行っている成果そのものです。

## Day 2 Diary Reading での成功体験が自信に！

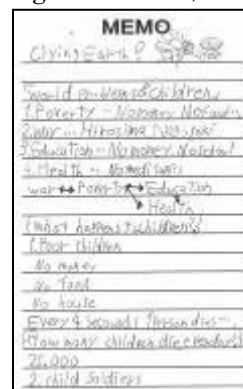
午前中の「Team Building」によって、グループの仲間と打ち解けてきた結果、他の子どもたちとは英語を交えた日本語で楽しく会話する場面が多くみられました。英語に関しては、自己紹介で「I'm Rio.」と言ったり、グループの前で今日の気分を発表する「How do you feel today?」といった活動では、「I'm exciting.」と発表したりと、短い英語ながら、大きな声で自信を持って話す場面が多くみられました。その後の「Making Flags」では、キャプリーダー（CL）の指示を理解し自ら率先して作業したり、友だちの日記のために一緒に辞書を調べてあげたりと、普段の Rio らしさが出てきました。また、この日、Rio は全員の前で自分の日記を音読する「Diary Reading」の代表に選ばれました。大人数の観



客の前だったせいか、正面を向くことができず、うつむき加減でしたが、「Morning Exercise was high tensions. I want Morning is more quietly...（朝の体操はテンションが高かった。朝はもっと静かな方がいいな）」と、ここでも普段の学習で身につけた英語の力を遺憾なく発揮し、会場から大きな拍手がおくられました。グループのCLによると、この日記発表での成功体験が彼女の自信を大きく膨ませるきっかけになったようです。

## Day 3 英語が聞ける！メモがとれる！

3日目で最も印象的だったのが、Rioの英語を聞いて書く力（note-takingのスキル）でした。午前中はCSによる「Global Warming」についてのプレゼンを聞く機会がありました。子どもたちはみんな、真剣に英語で行われる発表に聞き入っていました。このときRioはノート3ページに渡って「英語で」びっしりメモを取っていました。英語の発表を聞きながら、ノートを取る作業は大学生でも難しいことです。英会話学校や学習塾とは違い、普段から「書くこと」と「聞くこと」の両方に力を入れている公文式英語学習の底力を見た気がして、私自身驚きを隠せない状態でした。Rioの英語力も3日目の午後から徐々に開眼してきました。ホワイトボードに「This is Awajishima Island.」などと説明しながら日本地図を描き、自分の出身地をCLに教えてあげる場面もみられました。



## Day 4 英語を楽しむ！英語で楽しむ

この日は野外での「EIC Olympics」、午後の「English Festival」と、遊びやスポーツ、英語を使ったゲームを通して英語に親しむことに主眼が置かれた日でした。Rioはつねに笑顔で、英語を使い身体を動かすことを楽しんでいるように見受けられました。英語の指導法のひとつに、先生からの指示を正確に理解し、適切に反応できるようになるTPR(Total Physical Response)という方法がありますが、「EIC Olympic」や「English Festival」のように楽しんで身体を動かして覚えた英語は定着率が高いとされています。実際、Rio自身も毎日英語で記入する日記の中で「EIC Olympics is so fun. But it so hard. For example tug of war is so hard. But Jackson 1（グループ名） is win!!」と綴っています。

## Day 5

### Joke にも即答、感動を表現、Negotiation !

EIC の特色のひとつは、CL の出身国がさまざまであることです。Day 5 はその特色を生かし、CL が子どもたちに各国の文化を紹介する「TAW (Travel around the World)」と「Knowing the World」が行われました。Rio はドイツを紹介する部屋でフェイス・ペインティングをしてもらうのですが、CL がまだ終えていないにもかかわらず“Finished! (これで終わり!)”と冗談交じりに言った際には、“No. (まだ)”と一語ながらも冗談に即答できるようになりました。Rio には「TAW」で紹介されたそれぞれの文化が新鮮に映ったようで、日記では“Traveling Around the World is so interesting. Indonesia’s ‘fried banana’ is so yummy! Sri Lanka tea is so good! Malawi National Park is so beautiful...”と、多くの形容詞を使ってその感動を表現しています。さらに、午後に行われた食材の値段交渉をする活動 (World Food Market) では、CL の“Ten dollars. (10 ドルです)”に対して、“Eight, please! (8 ドルでお願い!)”とグループの交渉役を買って出る場面もありました。CL の指示を聞いて反応するだけではなく、自分の方から CL にお願いできるようになったのも大きな成長と言えます。



## Day 6

### 自分の意見を英語で発表!



終盤の6日目になり、Rio は更なる変化を見せました。午前中は CS により「World Problems and Children」と題されたプレゼンテーションが行われましたが、プレゼン後に CS が“What can we do to help?”という質問を全員に向けて投げかけた際、Rio はみんなの前で自発的に手を挙げ“We can go poor country, and volunteers. (貧しい国に行ってボランティア活動を行うことができる)”と意見を述べたのです。「大勢の前で自分の意見を英語で発表すること」という大きな目標をここで達成することができた

ことはすばらしいことです。自発的という意味においては、この日、もうひとつ大きな出来事がありました。夕食後に「Show Biz」(かくし芸大会) 催されたのですが、グループ内で発表者を募った際に、Rio は自ら“Can I? (私がやってもいいですか?)”と手を挙げました。そして、舞台では一人でトランプを使った手品を行ったのですが、大きな声で“This is trump. It is no trick. OK?”、“One volunteer, please.”と観客に向けて説明・指示しました (Day 2 の Diary Reading とは違い、目線は観客に、表情も自信に満ちています)。この時点での Rio の自分自身に対する信頼は、頂点であったに違いありません。



## Day 7

### いろんな国の人と英語で話せた「達成感」



キャンプ最終日、Rio の変化は英語的なものよりもむしろ感情的なものでした。“My name is Rio. Group name is Jackson 1. My dream is to become pet trainer...”と、少し緊張気味に自分の「Dream Poster」の紹介をする際や、元気にグループ発表 (ダンス) を行った時までは、前日までと同じ様子で CL や友だちと接しているように見えました。しかし、他の子どもの Dream Poster の発表を聞いている途中から、「終わり」の雰囲気を感じてか徐々に表情に変化が見られました。全員で“We Are the World”を合唱



する際にはすでに Rio は泣いてしまっていました。その感情は両親と再会した際や、EIC 終了直後に行ったインタビューまで続き、しばらく涙はとまりませんでした。「キャンプの何が楽しかったですか？」の質問には「いろんな国の人と英語で話せたことです」、「何が一番心に残っていますか？」には「World Problems や Poor Children のプレゼンテーション」と答え、それを解決するには「募金とかを少しずつでもやっていけば良いと思いました」と涙を流しながら答えていた姿が非常に印象的でした。

## 4. 事後インタビュー 自信の深まり～世界への関心～Take Action!

EIC が終了してから2カ月半後に、あらためて①EICの感想、②自分自身の変化、③英語学習（KUMONでの英語学習も含めて）、④将来の夢についてインタビューしました。

①については、直後のインタビューと同様「CLと話せたことが楽しかった」こと、「プレゼンテーションで知識を得た」ことと回答しましたが、更に、「新しくできた友だちと現在でもメールし合っている」ことを嬉しそうに話してくれました。

②については、EICで「本場の英語を経験した」ことで「自信がついた」と以前とは違い余裕がある表情で答えてくれました。

③の英語学習については、KUMON学習の中で「聞くこと」が最も役に立ったので、EIC後は「CDを聞く姿勢が変わった」と述べています。また、以前心配していた英語の発音についても話してくれました。私が思っていたことと同様、Rioは「読むこと」が発音や話すことに最も重要で、そのおかげでしっかり発音できたと感じたようです。



④については、以前同様、「動物の訓練士」とのことですが、EICの影響か「英語が話せる動物の訓練士」に小変更されていたのが面白い点でした。そして、夏休みの自由課題として、環境問題など世界のさまざまな現実について疑問に思うことを自分で調べ、EICの企画するインドネシアへのスタディ・ツアーへも参加を希望するなど、世界への興味関心を行動に移す積極性も見取れるようになりました。

## 5. まとめと考察

公文式の学習内容に自信を持たなければならないのは保護者？

EIC参加前の時点での英語力は子どもにより異なりますが、概してRioのように、「普段は英語を話す機会がないので、EICで自信をつけたい」という動機でEICに参加する子どもが大多数です。そして、傾向のひとつとして、Rioのように英語力がある（つまり、インプットの量が多い）と思われる子どもでさえ、自分のアウトプット能力を必要以上に否定的に捉えてしまっていることが挙げられます。もちろん、日常生活において英語を使う機会が限定されていることが理由のひとつですが、誤解を承知で言わせてもらえば、公文式教室で学習する内容は実践的ではない、つまりコミュニケーションにはあまり役立たないと「保護者の方が」捉えられているからではないかではと推測します。

私たちは「コミュニケーション」という言葉から、ネイティブのように日常会話できる状態を夢見て、それを目指すために自ら英語学習の方向性（きれいな発音を学ぶためにアメリカ人の先生しかいない英会話学校を見つける等）を定めてしまいがちです。しかし、コミュニケーションとは流暢に決まり文句を言い合うことではなく、Rioが教えてくれたように、英語、日本語に関わらず「まず、伝えたい内容ありき」です。確かに、Rioの英語には細かい文法的な誤りはありますが、例えば、Day4の““EIC Olympics is so fun.””という感想だけでなく、Day2で日記に書いた“I want Morning is more quietly.”という反対意見、Day6の“We can go poor country, and volunteers.”という提案は、まぎれもなく

Rio 自身が伝えたいことです。ある活動やテーマを共有し、多少間違った英語を使っても自分の「感想、反対、提案」を伝える勇気こそが、この EIC を通して Rio が教えてくれた道具としての英語の重要性でした。

もちろん、英語を道具として使うためには英語のインプットは不可欠です。しかし、やみくもに英語学習の機会を与える（「聞き流すだけで英語がペラペラ」という謳い文句の英会話教材等）のではなく、子どもの認知レベルに配慮しつつインプットを与えることに留意すべきです。その点、公文式学習教材は、テーマについて「読む」、「書く」ことを主軸とし、子どもに考えさせる機会を与えるものであり、インプットの質においては申し分ありません。Rio がそうであるように、「読む」ことで子どもは深く考え、自分の興味、関心の持てる範囲を広げていくものです。EIC でも「Global Warming」や「World Problems」というプレゼンテーションは子どもにとっては認知レベルの高いテーマですが、それにより子どもはテーマに共感し、「何かしなければ」、世界中の人と協力するために「英語で伝えなければ」という態度が育成されるのです。このように認知レベルが高い活動を取り入れているのも他の英語イマージョンキャンプにはない特徴です。

しかしながら、認知レベルが高い活動だけでは、子どもは疲れてしまいます。今回の Day 4 の「EIC Olympics」、「English Festival」のようにスポーツや遊び、ゲームを通じた活動を取り入れ、インプットレベルのバランスを取ることも重要なことです。もちろん、EIC という環境でこそ可能なことですが、公文式教室でもその日の学習教材を使った簡単な英語でのやりとりを行ったり、音読やスピーチの発表会など認知レベルが異なる活動を取り入れたりできれば、アウトプットを促す貴重な機会になるに違いありません。

実際、小学校の英語の時間では、子どもを英語に親しませることが主眼に置かれているため、ゲームや遊びを中心とした比較的認知レベルがそれほど高くない活動が行われています（Rio 自身も事前インタビューで「学校の英語活動はゲームばかりで簡単」と述べています）。時間的・環境的制約から、上記のような活動を取り入れるのが困難な場合でも、小学校英語（小学校での外国語活動）がそれを補っているので、無理に教室内での学習に変化を求める必要はありません。重要なのは、公文式教室で学習した英語を、小学校でアウトプットしている生徒の姿を想像しながら、自信をもって日々指導するという意識改革です。2011 年より小学校英語が完全実施されますが、公文式教室での英語学習と小学校での英語活動は互いに補完的なもので、2 つが目指す方向は一致していることを改めて認識する必要があります。

事後インタビューの中で、Rio に「EIC の後で新しく始めた英語学習はありますか」と質問したところ、「特にない」とのことでした。Rio は今回 EIC に参加したことで、今までの自分の学習内容が正しかったことを確信したのでしょう。Rio の返答を聞く限り、公文式の学習内容に自信を持たなければならないのは保護者の方のようです。親が子どもを教室に送り出す際、指導者が英語の採点をする際、多文化が入り混じり、英語で意思疎通しあう日本の将来の姿に思いを馳せて下さい。その想像材料として、この EIC の観察レポートが一助となってくれることを切に願っています。

#### < レポーター・プロフィール > 武藤 克彦(むとう かつひこ)

大妻女子大学講師。上智大学大学院修了(言語学)。専門は応用言語学、英語教育。教鞭をとる大学のみならず、小学校英語から企業英語教育まで応用言語学を軸に幅広い視点で英語教育に携わっている。同時に国連英検指導検討委員、ANA 航空英語アドバイザー等も務める。著書に『起きてから寝るまで英語表現 700』(アルク)、『読める！英語リーディング通勤解速トレーニング』(マクミラン・ランゲージハウス)いずれも吉田研作氏との共著など多数。大学院生のとき、リサーチのため初年度の EIC2001 に参加。10 年後の今年、再度 EIC2010(CAMP1)にフル参加して現場をレポート。



# アンケートの結果から (n=246/回収率 100%)

## 1) 参加者の属性

### 【学年・性別】

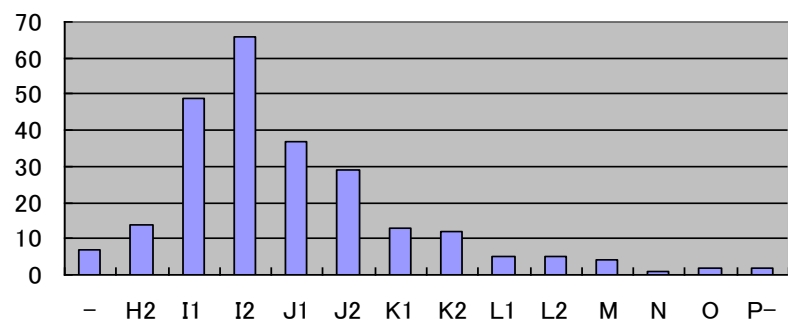
学年	男子	女子	合計
小 4	20	31	51
小 5	37	46	83
小 6	41	71	112
合計	98	148	246

### 【英検】

5級	4級	3級	準2	2級	-	合計
34	129	53	9	2	19	246
14%	52%	22%	4%	1%	8%	100%

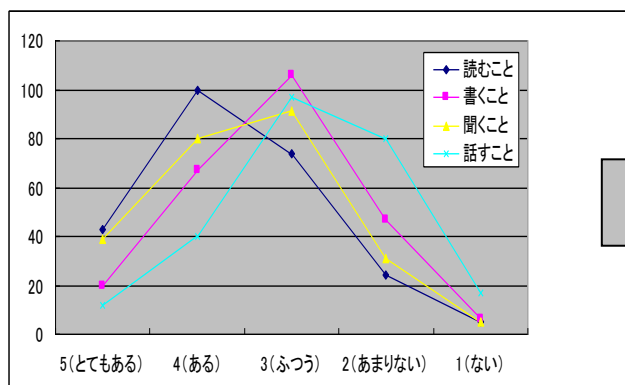
I1, I2教材の学習者が最も多く、英検の取得級でも4級が全体の約半数を占めている。極端に進歩が高いわけではないが、コミュニケーションを図るために必要な英語のインプットを持っている子どもたちである。

英語学習教材別 参加者数



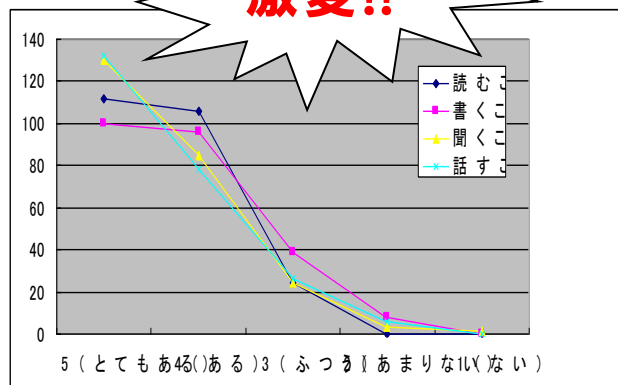
## 2) 英語に対する「自信」の高まり

### 【参加前】



「読むこと」だけは「4」が多い。AV:3.6  
「話すこと」AV:2.8

### 【参加後】



すべての項目において「5」:「とても自信がある」との回答が最も多くなった

## 3) 英語を学ぶ目的(複数回答可)

目的	参加前	参加後
コミュニケーションのため	98	<b>153</b>
夢・将来のため	87	89
世界を知るため・社会貢献のため	29	27
進学・資格取得	13	1
その他	33	2

「コミュニケーションのため」との回答が 1.5倍に増加。道具としての英語の重要性を実感し、もっと上手にコミュニケーションできるようになりたいという気持ちが高まった

